

博 士 学 位 論 文

内容の要旨および審査結果の要旨

2022年3月

帝 塚 山 大 学

はしがき

本号は、学位規則（昭和 28 年 4 月 1 日 文部省令 第 9 号）第 8 条の規定による公表を目的として令和 4（2022）年 3 月に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨および論文審査結果の要旨を収録したものである。

学位記番号に付した乙は、学位規則 第 4 条 第 1 項（いわゆる論文博士）によるものであることを示す。

氏名（本籍）	平 松 典 晃（岡山県）
学位の種類	博士（文学）
学位授与研究科	人文科学研究科
学位記番号	乙第6号
学位授与年月日	2022年3月23日
学位授与の要件	学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号） 第4条第1項該当
学位論文題目	備前・備中における仏教民俗の研究 —報恩大師伝承の浸透と日蓮宗不受不施派の信仰—
論文審査委員	主査 帝塚山大学教授 高田照世 副査 帝塚山大学教授 清水昭博 副査 ノートルダム清心女子大学名誉教授 小嶋博巳

（1）論文内容の要旨	2
（2）論文審査結果の要旨	4

論文内容の要旨

本論では岡山県南部にあたる備前・備中地域をフィールドとして、仏教の民俗化と仏教民俗の諸相について研究を行った。表題に備前・備中の名称を用いたのは中世・近世の事象を中心に仏教民俗の検証を行うためである。とくに多くの寺院に伝わる報恩大師伝承が庶民に浸透する過程と、日蓮宗不受不施派をはじめとする不受不施諸派の信仰に重点をおいた。

第一章では備前・備中の報恩大師伝承の展開について論じた。報恩大師伝承は大和からもたらされ、備前・備中独自の伝承として確立された。中世前期の報恩大師伝承導入の主な目的は、寺の権威を示すことであったと考える。

中世後期には報恩大師が開いたとされる備前四十八ヶ寺が成立する。日蓮宗の拡大に危機感を覚えた密教寺院勢力が結束した可能性を指摘し、最終的には宇喜多氏の庇護のもと金山寺豪円により天台寺院を優遇しながら、真言・日蓮寺院を含む形で最終的に成立したと考える。

中世後期の報恩大師伝承は主に勧進に伴って主張されることがわかった。江戸期になると備前四十八ヶ寺を構成する寺院や備中の寺院にも伝承が拡大したこと、中世寺院が解体され民間寺院に姿を変える過程で伝承が拡大したことも明らかになった。また江戸中期以降には庶民による備前四十八ヶ寺の巡礼や報恩大師信仰がみられるようになる。江戸期の寺院が報恩大師伝承を導入する目的は、庶民の信仰を獲得するねらいがあったと考える。

第二章では現代にみられる報恩大師信仰と智明権現の祭りについて論じた。まず現代にみられる報恩大師信仰の事例を報告し、口承伝承として語り継がれている報恩大師伝承について論じた。中世には主に山岳寺院でもたれていた報恩大師信仰が、庶民の間にも拡大し報恩大師信仰として浸透していることが明らかになった。

次に備前における智明権現の信仰について論じた。智明権現は伯耆大山寺の本尊で、牛馬や農耕の神として信仰されている。備前では備前四十八ヶ寺や天台寺院で祭祀される例が見られる。また備前の大賀島寺では現在も本地仏である地蔵を神輿に乗せて渡御する祭りが行なわれており、江戸期には熊山にあった霊山寺でも同様の祭りがあった。智明権現を祀る寺院からは大山を遠望できる場合がある。大山を望むことができる地域に大山信仰が広がっていた可能性が考えられる。

智明権現の勧請や祭祀については、中世末期に大山寺から備前金山寺に入った豪円や、近世に大山寺と関わりが深かった修験道の児島五流が関わっている可能性を指摘した。

第三章では、民間寺院の成立について論じた。まず中世の山岳寺院である備中の日差寺と福山寺が解体され、それぞれの子院が周辺村落に移り、ムラの祖先信仰を担う民間寺院に姿を変えていることが明らかになった。また備前にあたる今日の岡山市東区瀬戸町大井に近世初期に存在した日蓮宗不受不施派の蓮久寺が、祖先信仰を担う民間寺院として創建されたことがわかった。

第四章では備前・備中で信仰される日蓮宗不受不施派と不受不施諸派の信仰について論

じた。まず不受不施派の歴史を検証したうえで、民俗調査によって得られた不受不施派信仰の事例について考察した。

和気町益原の杉本家には不受不施僧を匿ったとされる隠し部屋や、三宅島流僧の日珠をはじめとする不受不施僧から授けられた曼荼羅本尊などが多数伝えられていることが明らかになった。杉本家が内信者組織のなかで重要な役割を果たしていたと考えられる。また同家の位牌・過去帳・石塔に記された法号と、弾圧当時の檀那寺に伝わる法号を比較し、弾圧下に展開した内信の実相に迫ることができた。

このほかにも岡山市北区御津矢原では、調査時に「清者」と刻まれた石塔を見つけることができ、同所に内信者から不受不施僧に布施をする際に、施主の役割を担った清者が実在したことをつかめた。岡山市東区瀬戸町鍛冶屋の御庵を中心に展開されていた久米右衛門派では、日蓮宗寺院による葬儀の後に久米右衛門派による葬儀を行なうなど、弾圧下と同様の信仰が昭和五十年代まで続けられていたことが明らかになった。その背景には天保法難の際に久米右衛門によって伝えられた講門派の正統な教えを堅持しようという強い思いがあったと考える。

さらに岡山市北区加茂にある政所講中では、白川門流日題派が信仰されている。政所講中も天保法難で僧侶を失ってから、信者によって信仰が維持されてきた。講中には京都中京組長栄講中のオタカラが伝えられ、その中には曼荼羅本尊などとともに遺歯・遺髪・遺骨が含まれていた。これらの遺歯などは日題派の信仰を行なう人々によって供養されることを望み、備中の政所講中にもたらされたものと考えられる。

以上のように仏教が民俗化する過程と仏教民俗の諸相について論じた。報恩大師の伝承と報恩大師信仰、智明権現や不受不施諸派の信仰は備前・備中における仏教民俗の特徴といえる。

審査結果の要旨

本学位（博士）審査請求論文は、備前・備中における仏教民俗の事象を分析し、仏教がいかに民俗化し、庶民に定着したのかを究明するところに研究目的を置く。仏教民俗のうち、報恩大師伝承と備前四十八ヶ寺の信仰、民間寺院の成立と先祖信仰、日蓮宗不受不施派の内信時代と公認後の信仰について論じている。岡山県南部地域をフィールドとして民俗調査を度々実施し、民俗、古文書、金石文などの史資料を収集し、それらを駆使して課題に迫った。

本論文は全四章から成る。

第一章、第二章では、報恩大師伝承の成立と備前四十八ヶ寺結集に関する先行研究を再検討するとともに、近世の四十八ヶ寺巡礼、報恩大師入寂地伝承の生成、近現代における報恩大師の祭祀などを考察し、近世以降、報恩大師伝承が庶民に浸透していた状況を描こうとしている。従来、報恩大師については主として古代の史料を、備前四十八ヶ寺については中世後期の史料を用いた歴史学的観点からの議論があり、また、近世以降については近年の岡山県立博物館の展示解説があるものの、近代以降の民俗学的なアプローチはなかった。本論文は報恩大師伝承と備前四十八ヶ寺の研究にとって、新局面を切り開いたものといえる。

第三章では、民間寺院の成立と先祖祭祀について論じている。中世の山岳寺院である日差寺（現・倉敷市）、福山寺（現・総社市）が解体され、それぞれの子院が周辺の村落に遷り、先祖信仰を担う民間寺院として成立したことを検証した。さらに岡山市東区瀬戸町の蓮久寺は近世初期に先祖供養を目的として創建されたことを明らかにした。竹田聰洲先生、赤田光男先生は、太閤検地によって庶民の「家」意識が確立し、先祖信仰がたかまったことを受けて、葬送儀礼と先祖信仰を担う民間寺院が成立したと説く。先生方の研究をもとに、岡山県下での民間寺院の成立を論じ、事例研究に先鞭をつけている。

本論文の中で特に注目されるのが、第四章「日蓮宗不受不施派の信仰」である。岡山藩は寛文六年の寺社整理以後、日蓮宗不受不施派の信仰を禁じたため、不受不施派の信者は内信者として密かに信仰を守り、明治九年に不受不施派が公認されるまで、内信と呼ばれる信仰形態が継続された。このような岡山県の不受不施派の信仰は近世宗教史上の重要なテーマの一つであり、宗教史的な研究は少なくない。しかし、内信時代の宗教生活の実態は不分明なところが多く、また、明治の公認以後の不受不施派信仰の民俗調査はほとんど行われていなかった。本論文では、日蓮宗不受不施派、不受不施日蓮講門宗、久米右衛門派、白川門流日蓮派の各地域で民俗調査を実施し、内信当時の信仰を探るとともに、公認以後の不受不施派の信仰について詳細に報告している。聞き書き調査と新資料の発見、確認により、信仰の実相を明らかにした画期的な成果である。なかでも和気町益原に

おける検証は極めて重要である。(1) 和気町益原の杉本家の蔵に現存する隠し部屋は、内信の拠点として機能した大樹庵であった可能性があること。(2) 杉本家には内信組織を確立し三宅島流僧となった日珠をはじめ、不受不施派僧から授けられた曼荼羅本尊や仏具が多数伝えられていること。また、それぞれの写真撮影を許可され、新資料として提示したこと。(3) 杉本家に宛てられた日珠ほか不受不施派僧からの書簡が「法泉寺文書」に多数含まれていること。(4) 杉本家の位牌・過去帳・石塔の法号を調査した結果、檀那寺による葬儀後に法号を一部改変している事例と不受不施派で新たな法号に付け替えた事例が判明したこと。以上の諸点を指摘し、信仰の根底に先祖信仰があると論じた。

以上の通り、本論文は岡山県下の仏教民俗についての意欲的な歴史民俗学研究である。史資料の分析、考察に課題を残すところがあるが、丹念な聞き書き調査と資料調査に基づいて導き出された新たな知見と成果は高く評価できるものであり、本論文は博士（文学）の学位授与に充分値するものと認められる。